



覺 醒



短歌詩集 3

izchan

章

頁

森 ～ポジティブ変換器

.....
2

ジッタ、ジッタ、雨

.....
3

社会派詩人 宇宙クラゲ

.....
4

『Pure Spring』

.....
5

花ポテンシャル ～覚醒の波

.....
6

砂場の犬とネコのしっぽ ～Poem Therapy

..... 7

魚精

.....
8

祭りのお面

.....
9

童話ウサギさん投稿しました。

.....
10

α における1羽の蝶

.....
11

緑はやさしくて、
街からの風のお話相手

卯月（鬱気）ぬけ
脱ぎかえる色
うす衣に
くったくもなく
肌匂わせて

透きとおる山水は、
くすぐる沢蟹とおしゃべり

シャユカソワ
おしゃべり好きな
水の声
沢蟹わらい
ころげまわる

今日も今日とて
カワセミはようやくの命で
シアワセの答え探し
（どんな味？ （美味しいの？
おまじないは ダイビングのタイミング
縁（えにし）の風味はいかがでしょう
——ざらざらり 舌触り…

はい たべました！

鬼火がひとつ
仄暗い川べりをたいした王さま気取りで
跳びはねまして
跳び跳びはねまして またはねまして
き～らんきらん
イノチの髄液ゆさぶります

ほーい

踊る、やんや

鬼火あやつる、

ほーい ほうい

踊る踊る、やんややんや

鬼火あやつる、あわや釣られて、

ほーい ほういほうい...

釣り人のランタンでしょう

森のどこかで

イヌワシから逃げる...

さなかずら

苦楽を紙漕（こよ）り蔓（つる）絡み

涙（るい）の数ほど愛這いのぼる

肢の速い、ウサギ...

いねむりの夢のカケラが

心でキララ

ジッタ、ジッタ、雨

ジッタ、ジッタ、雨にぬれてる…

ジッタ、ジッタ、雨にはぐれてる…

子ねこはサイコロみつけた

電信柱はうごけない

靴たちは天性で跳びはねる

ああ、ここは渦巻きの街――

小づくりな家々は、それぞれの野心でせわしないね

大柄なビル群は、はりぼての装飾でけたたましいね

ギラついて尖ってる通り…

人なつこい理髪店の飼い犬が声をかけ

雨降りにゃ だれもかれもが もちはこぶ

傘にあわせた 心のサイズ

「傘がないとやってゆけませんよ」

「顔を消すためですか？」

ジッタ、ジッタ、雨にぬれてる…

ジッタ、ジッタ、雨にはぐれてる…

あの子のはぞきこむ

ほんしつは グルグル巻いて どこでしょう

街は顔なし 傘ばかりだね

子ねこはサイコロたべた

電信柱はわらう

靴たちは天然で飛びはねる

ジッタ、ジッタ、雨にぬれてる…

ジッタ、ジッタ、雨にはぐれてる…

社会派詩人 宇宙クラゲ

リ・リン♪

ラ・リン♪

ル・リン♪

ちっぽけ だけど すごおおおい とクマノミが泡のように
しづやか だけど にぎにぎしやか とサンゴが珠のように
がんじょう だけど ゆらめいて とカイソウが粒のように

リ・リン♪

ラ・リン♪

ル・リン♪

クラゲが みんなの話をすいすい吸いあげ頭の中
蔵にしまう

リ・リン♪

ラ・リン♪

ル・リン♪

イソギンチャクが しゃわしゃわ がつつり
ヒトデが のっそり がぶり
カニが ちゃりちゃり がじがじ

みんなの話をすいすい吸いあげ頭の中 クラゲが

蔵にしまう

リ・リン♪

ラ・リン♪

ル・リン♪

サメ ほかにもいるよ
イルカ いっぱいいるよ
クジラ まだまだいるよ

リ・リン♪

ラ・リン♪

ル・リン♪

すーい すい

みんな の 声 を

変換 し

クラゲ 蔵（基地） か ら

宇宙語 発信

リ・リリ♪

ラ・リリ♪

ル・リリ♪

『Pure Spring』

命の炎（ひ）
彩（いろ）を噴き上げ
花霞
谷を渡りて
啼く空にまで

駅に貼られた奥山ではヒナ鳥が
やうやう飛び方を覚えた頃だろうか

昼時のささやかな溜め息
湾沿いのベンチではくたくたの靴が化身のように列をつくり
糧稼ぎの波形の長くつづく谷底で
花壇のアイリスの黄いろに慰められている日々は
ほんの一押しでぬかりそうな様相

なくほどに
ピュア・ウォーターを
さがしては
春の田んぼで
蛙（あ）は泥すべり

とぼしい山合いの転地返しはともあれ済んだろうか
旅はあちこち土の匂い

アスファルトをいつも情けながる兎の赤い目
を鞆に持ち運んでる女の子
「バス停に降り立つ飛天は人間の姿をしているはずだよ」
と本屋で鸚鵡（おうむ）の着ぐるみ

ねえ そんなにムズカシイことなのかな
生活しながら心の音を聴くこと

卯（う）の鈴が
ピュア・ウォーターに

りりと鳴り
つづらつづくか
雪どけのうた

街のビル風には遠くて哀しい
Pure Springの響き・・・

花ポテンシャル ～覚醒 θ 波

窓は今日という哀しげな格子を外し
ものいわぬ陽の捨て犬を戯れさせています
ポドウルル パドウルル ペドウルル
牧場をつくりましょう
井戸をほりましょう

あふれだす摂理の水をぐぐと飲み
彩《いろ》うるやかに花立ち返る

四つ葉のクローバーには
働き蜂
やんちゃな航路の1つで
はじけた真珠が生まれようとしています
野のスズランでしょうか

緑なす原に覚醒 θ の波
風のブラシが鈴色りりん

萎れた記憶にあてがわれた色の名前
ひとつひとつ塗りかえて
ポドウルル パドウルル ペドウルル
命をワルツするのは
私ひとりの健気でしょうか

砂場の犬とネコのしっぽ ~Poem Therapy

(アレ?おかしいな
磨り減ったタマゴ豆腐みたい)
ドクンって
ちょっと頭痛のドクン
ドクンドクンのかなりな頭痛

「いつから？」
「お昼からひどくなって…」

イレギュラーバウンドして
雨の日に突っ込んだ
雨の日に突っ込んだ
雨の日に突っ込んだ
じゃらじゃらの惨めむくじゃらアタマごと
砂場の犬を葉奏風呂へ
チェリーのお茶でなぐさめて
コアントローのほう色が色がゆらめく
…すこしだけ
…………ね…む…………り
……………

(ヒーリング関数
(ねむり粒子
(紅茶色の、微分
……………やさしい、雨
…………雨…………雨…………
ふかふか
タオル
リリ…♪
リリ…♪
リリ…♪
リリ…♪
リリ…♪
リリ…♪
リリ…♪

ねこの目読書——
柿の種まく物理学者はしっぽ論で
客ぎらいな細雪作家はしっぽの気持ちで
(くすっ)
のん気な根気の奮起は天気しだい
の臨機な本気
安気ネコ
泥路ぴょんと跳びぬけて
しっぽふりふり屋根の月詠む

ポエムなallusion…

(うさぎの懐中時計、いま何時?)

魚精

砂獄の蝶のようだと泪ひとつ
見せず君がつぶやく窓辺は砂色に濁き
なぐさめの色を探す僕
海のようなビードロをからりと摘まんでみせても

「人はね、過酷があたりみみたいな顔をして居座れば、
感情の琴線はバラバラと崩れるように褪色して…
もう叫ぶほどのコトバも拾えないショートした電子盤になるんだわ。」

神秘の水底で小さな歌に哀しげに
バイブレートしていた魚精
今は肺魚のように
わずかな空間の隙間に屈託なく

REM睡眠

…ゆめの渚（みぎわ）にいて

………

………

鳥獣戯画のような
可笑し味

感情が時間の裁断機に呑み込まれて
しまわないようにと
君が置いた心の衝立はファンタジアへのかぎろひだろうか
ふっと現れては消える… カオスな絵柄たち

狐 「まったくもってのイノシシ女史の猪突猛進ぶり 向かうところ敵なし
このキツネの眼鏡に適うとは大したもの」

猪 「なんの キツネ君の身軽さ・軽はずみさには比肩すべくもなく
タヌキ氏いかに蘊蓄（うんちく）されるか」

狸 「皆の衆味わいがおありで そもそも闇鍋とは出汁の相乗効果のΣ（総和）
云云かんぬん…ハハハ 匙加減はこのタヌキには及びませんがね」

鼠 「お目汚しで失礼 ネコもどき虎視眈々では負け知らずのネズミと申します
キツネ様始め皆様のご高名はかねてより このネズミめもお仲間入りを」

狐 「これはこれは 日和見コウモリ某の名で知られたネズミさん
このキツネ主催の闇鍋パーティーへよくぞ参られました」

狸 「いやいや そもそもキツネ君の主催といってもですな 云々かんぬん…ハハハ
このタヌキの許可なくばいかなるパーティーは開けないのはご承知か」

猪 「ゴチャゴチャぬかすと皆まとめて頭突き食らわすぞ
このイノシシ様を崇めよ 権威・権力に諂（へつら）え 力で捻じ伏せるぞ」

狐 「このキツネの能力不足にして場を納めてもらえませんかね
ああ もう投げ出したい」

鼠 「さすが強烈な個性の皆様 自己主張も半端じゃございませんね
イノシシ様もどなた様も このネズミめにお目をおかけくださいますように」

猪 「気に食わん 子どもじみたキツネ 陰謀めいたタヌキ 切れまくりのイノシシ
おい ネズミ このイノシシ様の名を気安く呼んだな ぶっ叩いてやるー」

鼠 「ひえ～ タヌキ様 なんとかしてくださいませいし～」

寅教授の観察メモ：

いやはや この者たちは闇鍋政治には精通しているようだが
蕪村の俳諧のほうは恐らく知識があるだけのことで不向きと見える
この観察は随筆の『銀座オリンピック』の項にでも付記しておこうか

兎（と）が晒う

手ぬるい謙虚枚挙にもどしゃ降りすれば抗いもなく

鳥が啼き

瞬きひとつ俯瞰（ふかん）する地の蠢（うごめ）きも筆づかみして

花の詞に

匂いたなびき風の手に蝶がのりきて蜜さがしおり

.....

.....

月明かりが幻想的な楽隊引きつれ

春の薄衣をキラメさせる

フュー♪ フュルル♪

わたしの手にはビードロの青い海

切なさの波が鳴る

（エラぶりたい人たちが多いだなと思う

欲望
渴望
野望の果ての
展望は
人望の真から程遠く

（顔のない作品群にデス・マスク

昼間目にしたチャライ紛（まが）い物
そこに碎かれる多くのコトバ部品たちが
メッキ工場から脱出を企てるという冒険談
を思いつく

『感動のポエム・ストーリー』 ——愛と夢なくしては語れない

罵倒家詩人たちも絶賛！

これがポエムとは21世紀初頭の奇跡であり屈辱だ

うすく剥離した知識のカケラが
ひたひたと青い感性で純化されてゆく
という楽想に耽り

（愉快的イマジネーションだ

.....

.....

光の美しいメロディーに
世界はやがて夜の覚醒をはじめるだろう
アノ肺魚も..
そこには意識のカオスから抜け出す
輪郭たちのダンス

∇（すべて）のX（きみ）に
彩やかなコトバの息吹を

人魚の声がきこえ..

祭りのお面

祭りのお面を付け替えるように...

有名な詩を次々パッくん。焼きなおしては染色し別モノとして投稿している人が某サイトにはいる。ちょっと巧い修辞に彩られた、彼女の詩を褒める人たちもいるのだが。（盗作の範囲外にしろ）どうにも、借りモノの感情、という感じがして、私の胸にはザラザラとした空虚さが残るだけでちっとも響かない。せっかくの資質を無駄に垂れ流し、本末転倒の詩作でイミテーションを陳列しているように感じた。たとえ誰かの詩を私淑したものであっても、たとえ表現や技術は拙くとも、詩作者自身の真の心の叫びをもつかもたないかで、そもそも詩の土俵は異なる。

通り雨ていどの雨宿り——。

ほんの通りすがりに見かけた女は、絵の中の‘悪魔の階段’をひた走っていた。階段下から女をウツトリ見上げる男たち。どこかひょうきんな構図だが、絵の中の人物にとっては座標は絵の中で完結していて瑕疵（かし）のない世界だ。だが、実はその絵は曼陀羅図の中の1ピースに過ぎず、わかる人にはわかるというものらしい。パッくんの出典をさりげなく言い当て、彼女にそこから抜け出すよう優しく意見している人がいて、少々驚いた。詩の世界にもやわらかな光が射しているらしい。

花紛う火焰の情か仮面つけ
みかけの月を虚しく冠す

童話ウサギさん投稿しました。

『シアワセの答え』 童話ウサギ

「つかれ…てるから…祭りは…おやす…みする。」

とやつれた小タヌキようやくの風前の声。

「あたしのスケジュール調整大変なのわかってるんでしょうね。」

と太鼓腹の姉タヌキとがった声。

森の広場————

2つのタヌキ鼓が途切れて…

そこで小タヌキは考えた。

(あたいのシアワセってなんだろう?)

小タヌキは服従という言葉が知らなかったが愛は知っていた。

(鼓のお稽古をして、あたいが祭りに出て、おねえちゃんが笑うこと!)

姉タヌキは愛は知らず義務に恋していた。

(あの子どうせ助からない命だもん。それまでりっぱな姉をやり遂げるだけだわ。)

.....

トントン

律儀(りちぎ)を鳴らし

うたいます

姉妹(仕舞い)鼓に

いのち燃やして

かなしいかなしい、後の祭り

作者(童話ウサギさん)のコメント:

野遊びをしていて、タヌキ姉妹が鼓の稽古をしているところに出くわしました。それは胸がハンマーされる光景で。切り株に覆いかぶさった大きな青苔。と思ったのは妹タヌキで、それを姉タヌキが怒鳴り散らしているのです。具合が相当悪かったんだと思います、妹タヌキは。悲しい後の祭り、という言葉が頭に浮かび、わたしは一生懸命ぴょんぴょん走って森のお医者さんのフクロウさんのところに話しにゆきました。「またアイツやりおって!」とフクロウさんはタヌキ姉妹のところにバッサバッサ飛んでゆきました。

わたしは巢穴に戻ってからも、トリモチが頭の中にくっついたみたいで。好物のキャロットケーキへのお誘いも遠い遠い宝島。おねえさまが心配して私のお耳に形のよいお鼻をくんくん、「ふむふむ、難聴ではないようね。さあ、訳をきかせてちょうだい。」そこでタヌキ姉妹のことをポロリ、ポロリ。泪はいつでもショッパイ心の言葉。

シアワセの答え、はどれもが薔薇色の小箱にあるわけじゃないみたい。ね、お星さま、そこからはどんなふうに見えるの？夜の煌めく窓は、お伽話が打ち寄せる宇宙の汀（みぎわ）。「私たち、童話ウサギの頭の中にトリモチがついたときにはね、悲しくってもお話を書きなさいのサインなのよ。」おねえさまの言葉がホントウに思えるみたいに、その晩の夢には悲しいお話楽しいお話いろいろなサウンドが打ち寄せました。

「曼陀羅（マンドラ）図のよう…、」次の日、わたしが夢のお絵かきをしてお話を書いていると、それを見ておねえさまが言いました。「ユングの深層心理学だわね。」ムズカシイことはわたしにはわからないけれど、頭の中のトリモチは消えていました。

上の詩は、そうして書いたものの1つです。読んでいただけたらウレシイです。

コメント： オオカミ兄貴

おねえさんはグラマーな美人なのかな？そういうものを想起させる描写に欠けている童話詩だと思ったな。おねえさんのセクシー度とか、そこが俺的には興味があるところなのに。たとえば、作者の耳におねえさんが鼻をくんくんさせるシーンではちょっとばかしエロスを加味して、「憧れのおねえさま、桃色の吐息がわたしの耳をくすぐります。世界のすべてがその甘やかなピーチの囁きに溶け、わたしの体の髄液をたぶたぶと揺らしはじめ、ああ、おねえさま…いつかわたしもアナタのようになれるでしょうか。」とかね。

お返事： 童話ウサギ

…テーマが違うと思うんですが。エロティックな童話詩がお好みですか。さすが赤頭巾ちゃんを食べちゃっただけのことありますね、オオカミ兄貴さん。

コメント： オオカミ兄貴

君は、童話におけるエロティシズムについてどう考えてるの？

いいかい、たとえばグリム童話には「赤頭巾ちゃん」だけじゃなくて「ラプンツェル」「カエルの王さま」なんてのもあるし、暗喩・提喩を解けば「シンデレラ」「白雪姫」だってそうだ。

お返事： 童話ウサギ

もともと巷の伝承だったメルヘンだけどグリム兄弟が編纂したときにフィルターされているから、オオカミ兄貴さんのみたいな卑猥な表現は出てこないわ。

あの、因みに、アドバイスいただいたシーンは童話詩の部分ではなくて、作者コメントですよ。悪しからず。

コメント： オオカミ兄貴

てか、作者コメントのほうがずっと童話詩らしいよ。

お返事： 童話ウサギ

そう言われれば…。あ、それオイシイです。いただきます！

どうせなら、このコメントもいれちゃおうかな。オオカミ兄貴さん、いいでしょうか？

コメント： オオカミ兄貴

俺はかまわないよ。しかし、なんつーか、「いただきます！」か。オオカミがウサギに食われる時代。畜生！俺、ガオー！…したい。。。

お返事： 童話ウサギ

オオカミ兄貴さん、コメントありがとうございました。

α における1羽の蝶

孤独なるムチ氏、
彼の切ないまでのむやみな喰い付きの訳は
文章美意識の1つ（国語という）
が渴望する火脹（ひぶく）れした思いにあるのかもしれない。

サイトに投稿された1篇1篇
大した雑作もなく作品をなぞりなぞりクリック！
絡まりの音と共に繰り出される校正と批評は
輝（ひび）割れた双方の感情によって眩（おとし）められ
むしろ痛々しくすらあるのだけれど。

婀娜（あだ）花を
徒（あだ）にのりづけ
艶消して
ふみ篩（ふる）う庭
蝶や何処に

舞いとぶ蝶が花の蜜を吸うように
我々は \forall （すべて）に出現する詩の瑞々しい美しさを味わう、
様々に…。

始原空のカオス・有限個の整数・宇宙の多次元・集団の1要素
・具象の実体・抽象のイメージ…。

+++++ +++++ +++++ +++++ +++++ +++++ +++++

みゃう～。
「もうそんな時間なの？」
みゃう～。
「わかった、わかった、お茶しようね。」

しなやかな毛並みが足にまとわり、
時間をおねだりする。
今日の午後の紅茶には、矢車草いりのローズティー。

まどろみの
午睡のような
前頭に
蔓バラ赤く
一輪語り

“Good evening, my princess!”

プレゼントされた真紅の薔薇の花束に
わたしは王女さまのうるわしい夢をうっとり描き、

“Good morning, my girl!”

野ばらのピンクに犬の散歩の軽快なスニーカーをつい止め
うつくしい煌めきにワタシはうらやかに詩を口ずさみ、

“Good afternoon, my lady!”

庭の赤い蔓バラの切花一輪匂いをたぐりよせ
うつろな時間の狭間にうっかりタメ息を私はもらす。

……おとぎ話はねむたくなるよね。
みゃう～。は鍋の中へ。

+++++ +++++ +++++ +++++ +++++ +++++ +++++

いま詩の花畑にひらはら飛びまわる
ムチ氏という、1羽の蝶。
微かな羽ばたきの波紋にイミは生まれる？
「風が吹けば桶屋が儲かる」
なんてことは落語、と思いきや、‘バタフライ効果’といい科学的にあることらしいから
オモシロイ！

ちょいマジメになり
‘バタフライ効果’についてウィキペディアを見ると、

1972年MITの気象学者エドワード・ローレンツがアメリカ科学振興協会で『予測可能性—ブラジルでの蝶の羽ばたきはテキサスでトルネードを起こすか』というカオス理論の初期値鋭敏性についての講演を行ったのが名の由来。‘バタフライ効果’は、カオス力学系において、通常なら無視できるとされるような極めて小さな差が、やがては無視できない大きな差となる現象のこととある。

ブラジルの
てふてふひとつ
羽ばたきで
弧星の嵐
小なる巨翔

感情表現のコーラー（場）として
詩は私たちに常に原初 α の存在を意識させる。
だが答えは α 自体にはなく

————バタフライ効果の、初期値鋭敏性。

ほんの僅かな絡み合いからでも、

幾様にも姿を変態させてゆく感情は定められた様式にそいつつも

予測不能な表現へと着地する。

無限のシナリオ…

これなる蝶のムチ氏

今宵も夢のしずくをポタリンと

うつつに滴り落とします

カオスの海へのお旅立ち

何方さまも事の顛末を

夫夫にお創りくださいますように

羽ばたき————嵐、テンペストの α 。